

おわりに

著者	岡田 敦子
雑誌名	東京音楽大学大学院博士後期課程 2019年度博士共同研究B報告書
ページ	90
発行年	2020-03-31
出版者	東京音楽大学
著者版フラグ	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1300/00001338/

おわりに

岡田 敦子（ピアノ）

2019 年度博士共同研究 B のテーマは例年になく順調に決まった。履修した学生は声楽、ヴァイオリン、ピアノ、ピアノ伴奏と全員が演奏を専門としており、日々の活動のなかで、また一人一人の博士研究のテーマとの関連において、日頃から感じていた問題であったのだろう。

しかし、実際に取り組んでみると、これは思いのほか手強いテーマであった。作曲家、作品、地域性、政治性、民謡との関連などさまざまな要素が浮かび上がり、「共同研究」としての一つの方向性を見出していくことは容易ではなかった。それに加え、昨年まで毎週開講であった授業スケジュールが今年度は隔週開講の 2 コマ続きとなり、なかなか継続的な論議に発展していくことができなかった。

あっという間に春学期が過ぎ去り、秋学期が始まってしばらく経ったところで、今年度をどうまとめるべきかと真剣な討議を行い、まずは論文集を作ること、そして学生からの強い希望でレクチャーコンサートも行うこととなった。

「民謡に触発された作曲家たち」と題して 1 月 16 日に池袋キャンパスで開かれたレクチャーコンサートは、広報期間が短かったにもかかわらず 68 名の来場者、34 名のアンケート回答者を得て、無事に終了した。4 人がそれぞれ自分の研究テーマに引きつけて採り上げた作曲家、サラサーテ（スペイン、1844～1906）、ドホナーニ（ハンガリー、1877～1960）、セヴラック（フランス、1872～1921）、ラヴェル（フランス、1875～1937）、ヴォーン＝ウィリアムズ（イギリス、1872～1958）と民謡の関わりを、一人ひとりが音と言葉で示していくにつれ、作曲家の多様なあり方が音楽の豊かさとして会場を満たしていった。

決して楽な道のりではなかったかもしれないが、学生各人にとって、そして参加した教員にとっても、今後の研究に資することのできる稔りある 1 年であった。